

平成16年度 日本農林漁業振興会会長賞

かみかづま
上鹿妻第一地区協同組合

(岩手県盛岡市上鹿妻)



写真1：機械利用組合による刈取り作業



写真2：産直施設「あいさい館」店内



写真3：「農リンピック」での田植え競技

特 色

1. むらづくりの背景・動機

上鹿妻第一地区は、盛岡市の中心部より西へ約5km離れた奥羽山脈の東山麓から雫石川流域に広がる平野部に位置する。雫石川と北上川とによって形成された沖積平野として肥沃な土地柄で、冬季は寒いものの夏季は比較的高温になり易い内陸性の気象条件を有している。市の中心部から車で15分程度という高い利便性のもとに、近年は都市化・混住化が進みつつある地域でもある。

地区内総世帯数65戸のうち農家は53戸、産業就業人口に占める農業就業人口割合が69%と、農業就業の多い地区といえるが、農家のうち44戸は第一種兼業、専業農家は3戸と、兼業化が進んでいる。古くから「太田米」と呼ばれる美味しい米の産地として知られ、一方でりんごやきゅうり、花卉などを組み合わせた少量・多品目の生産体制をとる農家も増え、果樹や野菜の作付けは年々増加の一途にある。

本地区のむらづくりの過程には、大きく3つの転機があった。

まず、昭和49年から50年にかけて行われた県営圃場整備事業を契機として、昭和51年に「上鹿妻地区第一機械利用組合」が結成された。この組合は、地区内の農家44戸（総農家の83%）で構成され、オペレーターとして中核となる農業専従者だけでなく、農作業の委託者側である兼業農家も構成員となっている。これがむらづくりの第1の転機といえる。

加入農家の減少や兼業化、混住化の進展などによって、種々の課題が顕在化するようになった。それを受けた検討の結果、平成元年、営農に関わる活動と地域コミュニティの維持に関わる活動を一体的に取り組むために、非農家も含めた地区内の全戸が加入する新たな協同組織として「上鹿妻第一地区協同組合」が創設された。この組合は、前述の機械利用組合の上部組織として位置付けられる一方で、盛岡市農業協同組合の下部組織としても位置付けられる。非農家を含む組合組織は同農協管内で唯一のものである。また、このままでは農業・農村の担い手が育たず、活力も衰えてしまうという危機感をもった若者達が、平成2年に協同組合の下部組織として青年部を創設した。これが第3の転機となり、以後、「日本一の青年部」を自負するこの集団は、本地区のむらづくりの推進において重要な役割を担ってきた。

2. むらづくりの内容

本地区のむらづくり活動は「上鹿妻第一地区協同組合」を中心に、その下部組織として、営農や直売の活動、若者・女性・高齢者の活動などを行うための集団が設置されている。この体系だった推進体制と役割分担によって若者や女性のアイデアが積極的に取り上げられ、多面的で個性的なむらづくりがすすめられている。

主な組織の活動の概要は次のとおりである。

ア 機械利用組合

水稲作業のうち耕起、代掻き、刈取りの作業受託を行う。構成員は44人で、専業農家のオペレーター7人が受託作業を担っている。組合としてトラクター1台とコンバイン2台を保有し、オペレーター個人の保有機材を併用しながら、地区全体の水稲作業の8割弱を受託している。組合としては受託面積の拡大意向を持っている。

イ 産直組合「あいさい館」

平成12年に設置。30戸の農家（夫婦）で構成され、主にハード部門（施設・生産）を男性が、ソフト部門（販売）を女性が担う。品物の95%は地区内の生産物、加工品である。施設全体の総売上げは年間6,000万円にのぼる。「朝採り」を原則に、とうもろこし、枝豆、りんごが売れ筋である。

ウ 青年部

構成員は57人（平均年齢42才）。いもち防除の作業受託、野菜ハウスのビニールかけ作業、鹿妻堰（雫石川からの用水路）の土手の草刈など、農作業や景観形成活動を行っている。加えて、「農リンピック」などのイベント開催のほか、「御神輿かつぎ」や「江戸木遣り」の出前演舞、除雪ボランティアなども行っており、本地区のむらづくりの仕掛人として牽引的役割を果たしている。原則として後継者を輩出するまでは青年部員であり、年齢層が幅広いことが特徴でもある。

エ 女性部

「あいさい館」での販売に向け、納豆、餅菓子、漬物などの農産加工に取り組んでいるほか、地元の中学校に出向き、納豆や漬物などの作り方の伝承活動、夏祭支援、他団体との交流を行っている。構成員65人。

農業生産面

(1) 農作業受託組織を中核とする効率的な営農の展開

「上鹿妻地区第一機械利用組合」は、専業農家のオペレーターを中核に、兼業農家も含めた44名の構成員で運営している。現在、地区内の水稲作付面積33.5haのうち77%にあたる25.8haの作業受託（耕起、代掻き、刈取り）を行っており、これによって個別農家の農業機械への投資抑制が図られている。また、水稲の防除作業は8割以上を青年部が請け負っている。一方、組合へ水稲作業を委託した農家は、委託によって生じた余剰労働力を活用して、転作田への果樹、野菜、花卉の作付けを拡大するなど、高収益作物の導入に積極的に取り組んでいる。将来的には、育苗や田植え作業も加えた耕起から刈取りまでの一貫した作業を請け負う組織へ発展させるとともに、組合を核に専業農家を加えた形での法人化を目指すビジョンも持っている。

(2) 手づくり産直施設「あいさい館」の運営

産直施設「あいさい館」は、都市近郊の利点を活かし、小規模農家が生産した野菜、花卉などを有利に販売して経営の安定化を図るために、平成12年に開設された。施設はプレハブづくり（約100㎡）でその大部分は会員の手づくりである。

施設の運営は、「お客様を大事に」をモットーに、朝採りの新鮮で安全な農産物を中心に、豊富な品揃えを年間絶やさずに行うことを基本にしている。現在、62品目が出品されているが、その95%は地場産の農作物や加工品となっている。その背景には、小規模農家の生産物が品薄になったとき大規模農家が出品するといった協力体制の構築もみられる。生鮮農産物の他には、女性部員が加工している納豆や餅菓子、漬物、乾燥野菜類なども販売し、消費者から好評を得ている。平成15年の総売上げ高は約6,000万円（1会員当たり200万円）で、上鹿妻第一地区の農業総生産額の6割を占めるまでになっている。

最近では、盛岡市街地の商店街のセールや様々なイベントへの出店要請もあり、盛岡市民から愛される産直＝地産地消の拠点として着実に成長を続けている。

(3) 消費者ニーズに的確に対応した冬場の野菜づくりへの挑戦

県内の多くの産直では冬場に生鮮野菜がみられなくなることから、「あいさい館」では、産直組合の女性会員を中心に、冬期間遊休化している水稲の育苗ハウスや既存の野菜ハウスを有効に活用した冬野菜づくりを行っている。厳寒地のため技術的に困難な面もあったが、栽培技術講習会の開催や県内の先進事例調査などを通じて技術習得に努めた結果、現在では、ほうれんそう、小松菜、水菜、山東菜などの多様な野菜を冬場に生産することが可能となった。これによって、30坪規模のハウスが水田に15棟新設され、また畑の利用率が年3作に高まるなど、稲作に依存する生産構造から、野菜などを組み合わせた生産性の高い生産構造への転換が進んできている。また一方で、これらの野菜づくりの拡大に伴い遊休農地20aが解消するなど、予想していなかった効果も発現してきている。

(4) 「結い」の精神に基づいた青年部のサポート

平成元年、環境への配慮からヘリコプター防除が中止されたことを契機として青年部による薬剤散布の共同請負作業がスタートした。また最近では、「結い」の精神を大切にしようという認識に立ち、野菜づくりを希望する全ての農家に対して、青年部がハウスのビニールかけを無償で支援している。これによって、高齢者や女性が野菜づくりに取り組み易くなり、生産者の裾野拡大に貢献している。さらに、鹿妻堰の土手の草刈など、用水路の維持管理と景観形成を兼ねた活動にも積極的に取り組んでいる。

(5) 消費者に喜ばれる安全な農産物生産 = 環境保全型農業の推進

本地区では、平成8年度からJA盛岡市が推進している「減農薬栽培米愛彩」の生産を開始した。その後、特別栽培米の基準に対応した減農薬・減化学肥料栽培にも取り組み、平成15年度の作付面積は7ha（水稲作付面積の20.9%）に拡大している。

また、平成15年度においては、新たな米政策改革に対応した活動の展開を図るための「集落水田農業ビジョン」を策定している。その中では、平成22年度までに作付面積の80%以上を特別栽培米として生産するという目標を掲げるなど、消費者に喜ばれる安全な米づくりを一層推進することとしている。また、転作田を活用した産地づくりに関して、野菜および果樹について農薬の使用回数や散布時期を確実に記帳し、トレーサビリティを実行することや、特にりんごに関しては、交信攪乱剤を導入した殺虫剤の散布回数の抑制（平均7回→4回）に努めるなど、今後更にその取組みを拡大することとしている。

生活・環境面

(1) 地域コミュニティづくりをリードする青年部活動の展開

本地区の青年部は、「農リンピック」の企画立案のほか、祝祭事における「御神輿かつぎ」や「江戸木遣り」の出前演舞、冬場の除雪ボランティアなど、地域コミュニティの活性化をもたらすユニークな活動を行っている。

とくに、「農リンピック」は、近年忘れられつつある「さなぶり」（田植えが無事に終了したことを祝う行事）を見直し、老若男女が集い古き良き農業に学び、新時代の農業に挑戦しようというもので、平成10年に初開催に至った。「農リンピック」は、集落を一周する小学生の聖火リレーに始まり、昭和20年代まで続いた馬による田の代掻き、畦（くろ）塗り競争、田植え競技、泥んこビーチバレー等の多彩な競技が行われる。2年後の平成12年には第2回「農リンピック」を開催し、これをマスコミが取り上げたところ大きな反響があり、市内はもとより県外からの一般客や子供達にも参加してもらった都市農村交流型の

イベントとなった。

(2) 郷土芸能の伝承活動の展開

本地区には、盛岡市の無形文化財となっている「上鹿妻田植踊り」と「上鹿妻念仏剣舞」の2つの郷土芸能が存在し、伝統文化を後世に伝えるという観点から、小中学生も対象とした伝承活動が行われている。

(3) 海外視察研修の実施

本地区では、以前から各戸で月々の旅行積立をして旅行会を隔年で実施してきた。平成7年度からは、組合員の親睦にとどまらず、諸外国の農業事情についても学ぶために、隔年毎に30～40名が参加する海外研修を実施している。最近の研修先は、平成11年度はタイ（水田、塩田、里芋畑）、平成13年度は中国農業公社（試験場）、そして平成15年度はオーストラリア（ケナフ農園、コーヒー農園）であった。外国の農業・農村事情を体感することによって、広い視野で日本の農業の長所、短所を学べるようになったことが大きな収穫となっている。